

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻142号 平成27年9月1日発行

「修身教授録」探求 (第百六回) 質問

森 信 三

今日は一つ質問の時間にしますから何でもよろしい質問してください。遠慮しないで…。でないと時間の経つのが惜しいですから…。

■「読み」を周囲が間違った時

東尾「岩波書店発行の『吉田松陰』の著者の名は「おうむら」と読むんですか」
先生「いいえ、玖村(くむら)」と読むんです。私の高等師範時代の親しい友人です。

藤本「本校の中にある「ともまつかい」というのは何ですか」

(この時ともまつと読んだのが可笑しいといって笑う者少なからず。しかし先生少しもお笑いがない)

先生「あああれですか。あれはともまつではなく、"ゆうしようかい"と読むんです。ところで今諸君のうちに笑った人がありますが、他人の読み違いを笑うものではありません。これは人間としての嗜みというものです。別して地名人名その他固有名詞の場合にそうです。人間嗜みの第一歩は言ってならぬ場合には絶対に言わぬということ、これがまず第一です。次に第二の嗜みとしては笑ってならぬ時には絶対に笑わぬということです。そも

そも無意味に笑うということは人間の浅薄なことの何よりの証拠です。かかる嗜みと工夫によって人間の人格的圧力は次第に増大するものです。諸君もこの人間としての嗜みということに気が着かなかったなら何年学校へ通っても何の役にも立ちません。

特に一番いけないことは諸君が他日教師になった際生徒の読みそこないを笑うということ。おそらく教師として最大罪悪は教師自身が生徒を冷笑するということでしょう。したがってたとえ全クラスの子供こぞって笑らおうとも、諸君一人だけは決して笑わぬというだけの心の引き締まりがなくてはいけません。それが教育者の愛情というものです。かくして一語を発せずして教育そこに行われろというものです。ですからもし生徒の読み誤りを教師が真つ先に立って笑うというがごときことがあったとすれば、それは実に言語同断の沙汰です。ところが現在の小学校には必ずしも絶無と断言できないようです。要するにそれは「教育者の道」というものが立っていないからです。さらにひどい教師になりますと、教師自身生徒を冷やかしたりする教師もあるようです。ここに至っては言語同断さえ通り越して、全く言うべき言葉がありません。斯様な教師をどれほど作っ

てみたところでそれが国家のため何にな
りますか。実際教育の大道廃れてここに
70年、明治維新以後教育の道は全く地に墮
ちたと言つてよいのです。願わくばせめ
て諸君らだけなりとも、誓つてかくのご
とき事を根絶さすという大決心を起し
ていただきたいと思ひます。

では次に何かありませんか何を聞かれ
ても良いのです。

■「友松会」のこと

中島「先生、友松会のご説明がまだです」
先生「ああそうでしたね。あれはですね、
この天王寺師範の卒業生の同窓会です。
いろいろ卒業生のことについてお世話を
しておられます。やがて諸君も本校を卒
業するとお世話になることでしょう。

■「愛読書」

中島「先生の愛読書は何ですか」
先生「さあ、これといつて愛読書と言
うほどのものはありませんが、今日の
私の思想の根本を据えてくださったのは
西先生の御書物です。それを基として古
人では二宮尊徳翁、中江藤樹先生、吉田
松陰先生、それに親鸞、道元、葛城の慈
雲尊者というような方々の書物、また西
洋では古代ではプロクノス、近代ではス
ピノザ、およびライプニッツ、そしてシ

ナでは何といつても論語ですね。それに
宋代の程明道という人も好きです。まあ
それぐらいのものでいいです。さあ、諸君堅苦
しいことばかり考えないで、自由にどし
どし質問したらよいのです。こんな時間
はそう度々は作れませんからね。

【注】程明道(ていめいどう)。中国の北宋時代の儒学
者。1032-1085年。河南洛陽の人で名は顥(こ
う)、字を伯淳という。弟の程伊川と共に二程子と
呼ばれる。周濂溪に学び、その影響を受けて誠に
よる感化を旨とした。程明道は「宇宙の生意とは万
物一体の仁、仁とは己とともに人を生かす共存の
心」と述べ、人がその天稟たる性の善を発揮するに
は、心を一にして敬を持って心を修めなければなら
ないと主張した。その思想は陸象山、王陽明へと受
け継がれることになる。

■「緊張感を持続した生活」

中島「先生はおいくつの頃が一番緊張し
た御生活だったのですか」
先生「人間というものは年をとるとも
にいよいよ緊張してくるようでないとい
けないです。これを刀で申しますと若い
間は大上段の構えでも良いですが、年を
とるとともに次第に青眼の構えになつて
来なくてはならぬのです。この言葉の意
味はたとえ今はよく分からないうとしても、
今後10年も経てばぼつぼつ分かつてきま
しょう。そして30年も経てばたいいの

人が分かるようになります。その辺に居
るタバコ屋や豆腐屋のおっさんでも40、
50となればこの意味は分かつて居るはず
です。それは人生の経験がこれを教える
からです。真の教育においては、一語千
万年を経るとも変わらぬというのが本当
です。理想としては常にそこを目指さね
ばならぬでしょう。つまりいやしくも教
師が教室で口にした事はいつ何時何処へ
持つていつて、何人に伝えられようとも
好ましくないものでなければならぬ。で
なければ真に道を説く者とは言えないで
しょう。しかしこれは理想を申したので
あつて、実際には全く不可能と言つてよ
い程に難しいことです。

■「好きな言葉」

中島「先生の好きな言葉は何ですか」
先生「手近な一つは修辞立誠という言葉
です。これは人間は言葉を慎むことの極
致において神に通ずると言うことです。
これは元来易経にある言葉ですが、なか
なか味わいの深い言葉と申うのです。人
間も言葉の慎みのいかに大切なことかと
いうことが分かりましたら修養もまず本
軌道に乗り出したと言つて良いでしょう。
最も手近なことでありながら案外この点
には気づきにくいものです。

次に日本人としていちばん根本的なも

のは「七生報国」と言う言葉です。これは諸君もご承知の通り大楠公の御言葉ですが、これをただ言葉としてではなく自分自身の身に受け止めるといことが大切だと思ふのです。つまり私共は私ども自身の立場において、いちど人間に生まれて来なくては出来ないほどの仕事を君国のために見つけなくてはなりません。すなわち希わくば我微々たりといえどもこの仕事を通じて君国に尽くしたい。しかもそれは幾そたび生まれ更わつてきても尚足りないというだけの仕事を見つけてさねばならぬのです。そこまで行かなければ、忠といつてもただ口先だけの言葉です。したがってまだそこまで行かなければ、真に日本人としてこの世に生を受けた意味は無いわけです。諸君にして一たびこの根本眼目を掴んだならば、あとの事はあたかも幾何学において公理から諸々の定理を導き出すように種々の信念が生まれてくるでしょう。

■泳力

飯田「先生はどのくらい泳がれますか」先生「50丁位です。もつともこれは若い時の記録ですから、今では怪しいもんですが…。」【注】一丁は109メートル。森信三先生はかつて三河湾を泳いで…。

■教育姿勢に関して

岡村「児童に対して厳格主義をとるべきかまたは温容主義をとるべきかどちらが良いでしょうか」先生「寛厳その宜しきを得べきです。寛くしすぎるとつけ上がりまずし、厳しすぎると伸びません」

■視学官

北澤「今視学官は何人ですか」先生「一人です。視学は10人ぐらいおりますが視学官は一人です。こういう質問は無論常識として知っていて悪くはありませんが、しかし現在の諸君にとっては第一義の問題ではありません。視学官などというものは役人で、大抵2、3年ぐらいで変わっていくものです。諸君はもつと根本のところ目をつけなくちゃいけないです。時間ですから今日はこれまで…。」(中島一雄記)

(修身教授録第三巻昭和18年9月 同志同行社刊)

神と人類と戦争(微言)

森信三

○神が歴史と無関係ならば、そういう神は相對の神に過ぎない。しかし如何に多くの宗教が現在尚そうした相對の域に留まっていることであろう。

○しかし歴史に内在しつつ歴史を導く神は世

界史の局限に到るまでは人類の救済を完成しないであろう。

○人類がこれまで神と歴史との関係についてほとんど考えないできたのは、神を単に個人救済の立場から考えてきた為であろう。

○個人…まこと個人を離れて神もまたない。しかしながら単に個人が救われる立場で考えられる神は、人類争闘の最大様式たる戦争に対しては全く無力である。

○神と歴史…この関係を明らかにしない限り、神も真実の神ではなく歴史も真の歴史とはならぬ。

しかるに今や人類はこの問題と取り組まねばならなくなつたと言つてよい。

○信者には懺悔悔い改めをすすめつつ、自ら懺悔悔い改めた宗教がかつてあるであろうか。唯一それがあるといえようか。しかし人類はまだそれに気づかない。全人類がそれを知る日…それは果たしていつの日であろうか。

○大抵の宗教は歴史に対して背を向けてきた。それは歴史的实现の重責を回避して彼岸へ逃避せんとするものである。

○宗教が歴史と取組むとき、そこに初めて宗教新生の第一歩は踏み出されるであろう。

○神は案外吝嗇である。一挙にして自己の全容を人類に示さないで、極めて徐々にしか自

己を啓示しないから……。

○神はその全容を一切時一切処に露呈すると説いた宗教もあつた。しかしそれは単なる個人的諦念の立場に留まるものである。この時宗教は阿片と嘲(あざ)げられても己むを得ない面を生じる。

○これまでの宗教は歴史が苦手であつた。しかし歴史を拒否する宗教は、絶対的なものではない。勿論歴史を拒否する宗教も尚存続しうるではあろう。しかしかかる宗教は時の経過と共に次第に色褪(あ)せてゆくことは確かである。

○歴史が問題になるということは人類が問題になるということである。随つてまた歴史を拒否する宗教は人類を拒否する宗教といつてよい。たとい観念的には全人類を救うと考へているとしても……。

○従来の宗教の誤りは個人を救いさえすれば、その総計(トータル)としての人類もまた救われると考へた点にある。これは目の子算というものである。

○真に人類を救い得る宗教には、単なる個人救済以上の或るものがなければならぬ。その「或るもの(サムシング)」を見いだす処に今後の人類の道はある。

○真に人類を救う宗教……その資格は只一つ。それは自己の根本的立場そのものを反省

すること、只この一道あるのみ。

○宗教者は無神論者を軽蔑してはならない。容易に無神論者を軽蔑する時、実は自らもまた軽蔑されるものとなる。

○無神論者も宗教者を軽蔑してはならない。何となれば真実の宗教には阿片のみでないものが含まれているからである。

○どちらが早く反省するか、どちらがよ少多く反省するか。歴史は結局その方向へ向つて流れるであらう。

○戦に敗れることによつてわれらの民族は今や大いなる「開眼」を得つつある。それは民族の歴史上かつてなかりしものである。たゞ問題はそれが世界史上かつてありしや否やの点にあるであらう。仮に世界史上未曾有の「開眼」だとしても、それは我々の民族の力というべきであらう。

(「開頭」第23号 昭和24年2月)

あとがきに替へて

今回の「微言」も初めての掲載である。愚生は不勉強でここまで神の本質?に迫つた論考に接した覚えはない。さすが森信三先生。「神」を鳥瞰されて余りある。しかも人類の有した時間軸と「戦争」に的を絞られていく。世界の宗教指導者が心してこの課題に応えて欲しいと願うし、また森信三先生の「真実の神」が奈辺にあるかを日本民族こそ一番理解しやすいと、ご暗示なさつておられるかと思う。宗教をどうするかは各自自由としても

「神」の存在はまあ疑う人は少ないであらう。そこでどんな「神」を考へるか森信三先生ははつきりと方向を示された。そして約70年を経て未だ愚生は「神」で迷つてはいる。それは宗教が懺悔と悔い改めを行うとは一体如何なることか。今でも宗教を勝手に解釈し非道の限りを尽くすイスラム国あり。宗教の非道を糺すに武力を以てすることは旧態依然である。この狭間に日本民族の立場をどう鮮明に?できるかだ。(28日二纂)

第151回「かよう会」のご案内

日時 平成27年9月15日(火)
18時00分～(毎月第三火曜日原則)
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交通 地下鉄:四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
9/15批評的態度というもの
10/13批評的態度というもの
11/17一日の意味
参加費 1000円

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn

臂 繁二